

令和元年度小松市立国府小学校 学校評価（年度末）

めざす児童生徒像

《やさしい子》 互いに認め合い、思いやりの心をもつ子
《かしこい子》 主体的に考え、共に学ぶ子
《たくましい子》 自身を高めようと、主体的に努力する子

※児童生徒達成結果－教員結果・保護者結果																
目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間				※差	年度末				※差	達成状況の分析	改善策	
				数値・アンケート結果（％）			※差		数値・アンケート結果（％）			※差				
				教員	児童生徒	保護者			教員	児童生徒	保護者					
（学校で設定）	組織的な学校運営	やかた行動の推進	すべての項目の割合が80％以上	①	児童は、周囲に対して思いやりのある心で接し、やさしい言葉や行動に表そうとしている(やさしく)	94	81	83	-13	95	85	78	-10	＜やさしく＞＜かしこく＞に関しては、それほど差異はなかった。 ＜たくましく＞に関しては、学級づくりが進み、行事や学習を通して、努力を続けられる児童が少しずつ増えてきている。児童の変化を肯定的にとらえている教員が多くなった。 2学期も、1学期に引き続き「や・か・た」の校風作りに、それぞれの部会で主体的に取り組むことができていた。	児童自身が、自分や友達の成長を「や・か・た」の視点で振り返り、できるようになったことを確かめられるとよい。 1月の生活目標は「自分の成長をみつめよう」である。この機会を生かし、自分や友達の頑張りや成長を見つけ出させたい。 保護者には、児童の良い面を見つけ言葉にしてもらえるよう、お知らせなどで呼びかけていきたい。	
				②	児童は、自分の可能性を広げるために、仲間と共に自ら学びに向かっている(かしこく)	94	84	67	-10	94	86	67	-8			
				③	児童は、自身や集団を高めようと、学校生活において粘り強く努力している(たくましく)	89	88	61	-1	100	87	63	-13			
				④	学校経営方針の具現化に向け、職員一人一人が参画意識を持ち、主任等を中心に一体となって教育活動にあたっている	95				100						
				集計					93	84	70		97			86
重点項目	石川県共通業務の改善	働き方や業務の改善	すべての項目の割合が80％以上	①	校務分掌や業務の整理・統合が図られており、業務の平準化がなされている。	79				75				中間と値が変化がなかった。早期退校日や定時退庁日を設定し、時間外勤務を少なくするよう呼びかけたが、効果としては現れなかった。	指導計画を週ごとに提出とし、少しづつ学年の指導に役立ってきている。今後軌道に乗れば時短につながる見通しを持っている。 今後も退勤時間を意識して仕事ができるよう、声掛けを続けていきたい。	
				②	教職員一人一人が時間管理の意識を持ち、最終退勤時刻を週3日以上守っている。	58				55						
				③	教育活動について、能率化・効率化を図り、組織として業務改善を図っている。	79				80						
				集計					75				75			

小松市共通重点項目	目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	数値・アンケート結果 (%)			※差	数値・アンケート結果 (%)			※差	達成状況の分析	改善策			
					教員	児童生徒	保護者		教員	児童生徒	保護者						
指導力の向上	学校研究	④の割合が80%以上	①	学校でテーマを決め、講師を招聘するなどの校内研修を行っている。	100				95				授業づくり、基礎学力それぞれの部会で考えた取り組みを全校で実施してきた。担任だけではなく、級外の教員、職員を含め、学校全体で取り組んできた。	めざす児童の姿を、「や・か・た」の教育目標と関連させて見直し、全職員で共通理解を図っていく。 国府検定や計算名人、家庭学習など、取り組みは定着してきた。今後、目的を見直し、それに応じた方法を検討していく必要がある。			
			②	研究主題に迫る目指す授業像（児童生徒像）を共有し、研究の視点に沿った授業研究会を計画的に行っている。	100				100								
			③	教職員一人一人が授業研究に主体的に取り組み、自校の授業改善に向けた取組を共有・実践している。	100				100								
			④	「国府小授業づくり」を毎日の算数の授業で実践している。	88				100								
			集計				97				99						
		授業	①②の割合が80%以上	①	児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	100	76		-24	94	82		-12	中間評価時に比べ、教員と児童の値の差が小さくなったことから、それぞれが良好な関係づくりを重ねて、教員が児童の力を適切に見取ることができるようになっていいると考えられる。 8割の児童が意欲的に学習に取り組んでいるので、その意欲をさらに継続させていくことと、残りの2割の児童の意欲向上に努めていく必要がある。 自分の考えを、発表したり書いたりして表現する力の伸びが小さく、表現力の不足を感じていることが分かる。	授業のねらいを明確にし、子どもがどんな姿になっているか(どんな問題をどこまでできるようにするか、どんな振り返りの言葉を書けるようになるか)を具体的に描くようにする。 意欲的な子どもの発言だけで授業を進めるのではなく、どの子も考え、「わかった」「できた」となる授業づくりを行う。		
				②	児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる。	76	81		5	88	84		-4				
				③	(発表力) 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	59	75		16	71	77		6				
				④	(記述力) 児童生徒は、自分の考えを書く機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して書いている。	41	77		36	53	84		31				
				⑤	児童生徒は、授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っている。	71	87		16	100	87		-13				
	⑥			児童生徒は、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	94	89		-5	100	94		-6					
	集計				74	81		7	84	85		0.3					
	学力の定着	学力調査		①	学力の重点目標や具体的な取り組みは全教職員で共通理解し、目標を達成できるよう取り組みは徹底して行っている。	100				84				・学力の重点目標や具体的な取組を全教職員で作成し、共通理解することではできたが、取組をしっかりとおこなっているかの定期的な確認と効果の検証が足りなかった。 ・単元末テストで80点以上の児童の割合が8割以上のクラスは増えた。しかし、目標を達成できたクラスが1～3年だったので、4年生以上の学年で学習内容の定着が不十分な児童の特徴として1～3年時の学習内容の定着が不十分であることが多いと考えられる。	・学力向上に関する取組を徹底して行えるように、取組の実施の確認や効果の検証を定期的に(月1回)行い、効果の有無により取組の改善をしていく。 ・教師一人一人の授業改善を図りながら、授業時間だけで学習内容の定着が難しい児童には帯タイムや放課後学習で学年の学習内容の定着を目指していく。特に、1～3年時の学習内容の積み残しがないように対策を講じていく。		
				②	学力向上ロードマップにおける各自の役割を教職員が理解し、定期的な検証がなされている。	88				89							
				③	近隣等の小中学校と学力調査の結果や分析、成果や課題を共有している。(小中連携)	53				63							
				④	国語・算数の単元末テストで80点以上の児童の割合がクラスで8割以上である。	25				40							
				集計				67				69					
		家庭学習			①	自分で計画を立てて勉強している(3年以上)	50	74		24	80	75		-5	・学習を始める時刻を自分で決めることで、7割以上の児童が決めた時刻に学習を始められた。さらに、学期に1回の家庭学習調べ週間で学校と家庭が連携して児童の学習の様子を確認することで、児童の家庭での学習習慣の確立を行えた。	・家庭での学習習慣の確立に向け、取組を継続させていくだけでなく、その内容の効果の有無を検証し、改善していく。	
					②	児童生徒の家庭学習の評価・指導を行っている	100				100						
					集計				75				90				